

- (68) 地図を 棒で なぞる。
 (69) *地図を 棒で つたう。
 (70) *地図を 棒で つたわる。
 (71) 点字を 指で たどって 読む。
 (72) 点字を 指で なぞって 読む。
 (73) *点字を 指で つたって 読む。
 (74) *点字を 指で つたわって 読む。

以上より、文型Cの中で使われる、つまり、N₅ (= 手段)をとるのは「たどる」「なぞる」の二語であることがわかる。

(63)~(74)の動作主はすべて人間である。また動作主が努力して「N₅ (=移動の主体)」を径路からそれないように移動させる、という意味の共通性がある。それでは、この二語の差異はどこにあるのだろうか。

- (75) *手本を 筆で たどる。
 (4) 手本を 筆で なぞる。
 (76) *不鮮明な文字を もう一度 ペンで たどる。
 (77) 不鮮明な文字を もう一度 ペンで なぞる。
 (78) *トレーシングペーパーを重ねて 鉛筆で 地図を たどった。
 (10) トレーシングペーパーを重ねて 鉛筆で 地図を なぞった。

以上の例文から、<「N₅」が筆記の機能を持つ場合>「たどる」は使えない。「なぞる」は<筆記具を、線的な図形の上を移動させて同じ図形を再現して書き写す>という意味特徴を持つが、「たどる」には<書き

写す>という意味はない。したがって「N₅」を移動させて図形が書かれるような場合には使えない。

3. 派生的用法

今までにもふれてきたが、比喩的用法を、ここであらためてまとめると、次のようになる。

「たどる」の比喩的用法

- (50) 日本は 敗戦への道を たどった。
 (48) 物価は 上昇の一途を たどった。
 (49) 病状は 悪化の一途を たどった。
 (79) 私は 記憶を たどって 財布を落とした場所を思い出した。
 (80) 彼は 血筋を たどると 源氏の末裔だということがわかった。
 (81) 二人は 同じ運命を たどった。
 (82) 話の筋道を たどる。
 (83) 芭蕉の 足跡 (=旅程, あるいは 行蹟) を たどる。

「つたわる」の比喩的用法

- (84) 噂が 人々の間を つたわってきた。
 (60) 誠意が 私から 相手に つたわった。
 (61) 熱気が ステージから 客席に つたわる。
 (85) 彼女の動揺が 私にまで つたわってくる。

言語経歴：1957年東京都新宿区生。2歳~調布市、現在に至る。

かがむ・しゃがむ・うずくまる

山本清隆

1. はじめに

「かがむ」「しゃがむ」「うずくまる」は、いずれも<足で体重を支える><身体を低くする>という点で共通する動詞群である。

では、辞書の記述にあるような(特に「しゃがむ」の項のような)同義語かといえ、次のような使い分けがなされるように、用法の上で、動作の上から——本稿ではこれに着目するのだが——はっきりと相違点が認められる。

- (1) a 年老いた母の 腰が かがむ。
 b *年老いた母の 腰が しゃがむ。
 c *年老いた母の 腰が うずくまる。
 (2) a ?爪先立ちで かがむ。

- b 爪先立ちで しゃがむ。
 c *爪先立ちで うずくまる。
 (3) a *路端に 犬が かがむ。
 b ??路端に 犬が しゃがむ。
 c 路端に 犬が うずくまる。

このような、三語間の用法差などを中心に、個々の意味を記述することが、本稿の目的である。

2. 分析の方法

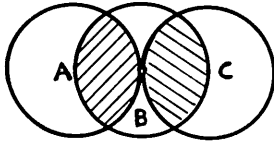
この一連の動詞、「かがむ」「しゃがむ」「うずくまる」の分析にあたっては、特に次のような点に留意した。すなわち、この動詞群(以後、三語をまとめてこう言う)の分析に関しては、他の類義動詞群のように

文例の比較・対照にとどまらず、その具体的な動作性をも考慮に加えた、^(注3)ということである。^(注4)

その理由は、第一に、本稿が柴田1963に対する回答という側面を有していること、第二に、いうまでもなくこの動詞群自身の性格によるものである。

後者についていえば、この動詞群の各語間の類義関係が必ずしも一様ではない、ということと大きく関わっている。辞書の記述からも容易に判明することのだが、「かがむ」と「しゃがむ」、「しゃがむ」と「うずくまる」がそれぞれ類義（あるいは同義）関係にあるのに対し、「かがむ」と「うずくまる」はその関係が希薄であると推測される。このことは、次のように考えられよう。つまり、「しゃがむ」の意味領域は「かがむ」と「うずくまる」のそれぞれの意味領域と重なり合う部分があるが、「かがむ」と「うずくまる」には重なる部分がないかあるいは少ない、ということである。この関係を概念的に表わしたものが、次の(図1)である。

図1



A・B・Cをそれぞれ「かがむ」「しゃがむ」「うずくまる」の意味領域とすると、AとCがどの程度離れているか、あるいは重なっているかは疑問として、BがかなりAとCに重なり合っていることは確かだと思われる。

この関係を具体的に反映している各語の動作性を、詳細に分析していくことは、決して無意味なことではない。

以上のような視点にたち、以後の分析を行なっていく。

表1

No.	Movement Type	A) 膝	B) 腿と脛	C) 腰	D) 背	E) 臀	F) 踵の離床	G) 膝の着床	(注5) 状況 (Situation)
1		-	- -	-	-	-	- -	- -	立っている (直立) 状態
2		-	- -	+	-	-	- -	- -	木戸などをくぐる 落とし物などを拾う
3		+	- -	+	±	-	- -	- -	水泳のスタート
4		+	- -	+	±	-	- ±	- -	落とし物などを拾う 草を抜く
5		+	- -	-	-	-	- -	- -	いわゆる“中腰”

3. 分析

3. 1 動作分析

3. 1. 1. 動作類型

本章では、身体各部位——主に下半身——の屈曲等を取りあげ、その有意性を吟味していくとともに、それによって描き出される動作類型(movement type:MT)を想定する。その中から、三語の基本的動作・姿勢を抽出していく。この結果を逆操作すれば、各語がどのような身体の動きを意義特徴とするかも判明する。

では、下にあげた身体部位について、考察を行なっていくことにする。

- A) 膝の屈伸：膝は曲げるのか、あるいは伸ばしたままか。
- B) 腿とふくら脛の密着：(上のA)項と関連して) 膝を曲げた場合は、腿とふくら脛を密着させるか否か。
左右両足を見る。
- C) 腰の前屈 (= 上体の前傾)：上体は床・地面などに対し垂直か、あるいは前傾させるか。
- D) 背中の湾曲：(上のC)項と関連して) 背中は湾曲させるか否か。
- E) 臀と床、地面との着離：臀を床・地面などに着けるか離すか。
- F) 踵と床・地面との着離：踵を床・地面などから離すか、着けたままか。左右それぞれの踵を見る。
- G) 膝と床・地面との着離：膝を床・地面などに着けるか否か、左右それぞれの膝を見る。

以上の七項目に留意し、その動作の推移を図表化したものが、次の(表1：動作類型)である。

6		+	- -	-	-	-	+ +	- -	同上
7		+	+ +	+	-	-	- -	- -	用便
8		+	+ +	+	-	-	+ +	- -	相撲の蹲踞
9		+	+ +	+	+	-	- -	- -	子供が駄々をこねる時 急に腹痛など起こした時
10		+	+ +	±	-	+	- -	- -	地面に腰をおろして休憩する時
11		+	- -	±	-	+	- -	- -	同上
12		-	- -	±	-	+	+ +	- -	腹筋運動をする時
13		+	- -	+	+	+	- -	- -	
14		+	+ +	-	-	-	+ +	+ +	
15		+	+ +	+	-	-	+ +	+ +	
16		+	- -	+	-	-	+ +	+ +	四つん這い
17		+	+ +	±	-	-	- +	- -	
18		+	+ +	±	-	-	- +	- +	立てひざ
19		+	- +	+	-	-	- +	- ±	靴のひもを結ぶ時
20		+	- -	+	-	-	- +	- ±	徒競争のクラウチング・スタイル
21		+	+ +	+	+	+	+ +	+ +	フトンの中で丸くなる
22		+	± ±	±	+	+	± ±	- -	コタツの中で丸くなる
23		+	+ +	+	+	+	- -	- -	犬などがオスワリしている

(補注)

○表中の記号は、以下のことを表わす。

+……その変化がある場合。

-……その変化がない場合。

±……変化・無変化の両様ある場合。

あるいは有意性のないもの。

○MT 1～23までの動作類型は、「かがむ・しゃがむ・うづくまる」のいずれかによって表現されると想定したものである。いわば、〈姿勢を低くする〉という動作の代表的なものである。

(MT 1は除く)ただし、注意したいのは、一つの類型が必ずしも一語によってのみ表現されとは限らず、また、いずれの語によっても表現されない可能性もある。

では、各語の基本的姿勢は動作類型のいずれにあたるのか。この点については、東京共通語の分析を中心に論考を進めていくことにする。

東京共通語において、各語はいかなる姿勢を表現するのか。その基本的な意識を、東京近辺出身者^(注6)(青年層)に対する若干の調査をもとに分析していく。

調査方法は、先の身体部位項目のうち、A)～F)の六項目に関する有意性を質問したものである。表2がその結果の概要である。

3・1・2 東京共通語話者の基本意識

表2

項目	項目名	話者	かがむ	しゃがむ	うずくまる	補注
A)	膝の屈伸	a. (F. 22)	±	+	+	+……膝を曲げる -……膝を伸ばす ±……どちらでもよい
		b. (M. 23)	±	+	+	
		c. (F. 22)	±	+	+	
		d. (F. 22)	±	+	+	
B)	腿とふくら脛の密着	a.	-	+	+	+……密着させる -……密着させない ±……どちらでもよい
		b.	±	+	+	
		c.	-	+	+	
		d.	-	+	+	
C)	上体の前傾	a.	+	+	+	+……前傾させる -……前傾させない ±……どちらでもよい
		b.	+	+	+	
		c.	+	+	+	
		d.	+	+	+	
D)	背中の湾曲	a.	±	±	+	+……背中を丸める -……丸めない ±……どちらでもよい
		b.	+	+	+	
		c.	+	-	+	
		d.	±	±	+	
E)	臀と床・地面との着離	a.	-	-	-	+……臀をおろす -……おろさない ±……どちらでもよい
		b.	+	-	±	
		c.	-	±	-	
		d.	-	±	-	
F)	踵と床・地面との着離	a.	-	±	-	+……踵をはなす -……はなさない ±……どちらでもよい
		b.	-	+	-	
		c.	±	±	-	
		d.	±	±	-	

上の調査結果から判明したのは、各語とも基本意識がかなり明確で、しかも各話者が共通したのもっていることである。多くの項目で、各インフォーマント(以後 Inf. とする)の回答が一致を見せている。特に興味深いのは、「かがむ」→「しゃがむ」→「う

ずくまる」と移るにしたがい、その一致する項目が増えていく点である(2項目→3項目→5項目)。これは、動作としての規定がこの順に厳密になっていく、と考えられる。この“規定”がいかなる意味を有しているか、その点を中心に各語の記述を試みる。

i) 「かがむ」

各 Inf. が一致して有意性を認めている項目は、A) と C) であり、他の項目も比較的よくまとまっている。したがって、動作としてはかなり明瞭なものである。

まず、基本的意識としては、〈上体は前傾させる〉〈膝は曲げても曲げなくてもよい〉が強い。A) 項に関しては、他の二語がいずれも〈膝を曲げる〉を必要条件としているのと対照的である。また、C) 項に関しては、三語とも〈上体の前傾〉を必要条件と認めているのは、この動詞群の重要な特徴を表わしているといえる。(注2参照)

他の項目については、〈腿とふくら脛を密着させる〉(注7) 〈臀をおろさない〉は、Inf. b. を除いて一致しているの、一応まとまった意識としてよいだろう。

(この二項目については、先のA)項と相関関係にある。)

残りの項目、D)・F)に関しては有意性を認め難い。

以上の特徴から帰納される「かがむ」の基本姿勢は、ある程度「腰高」のものであり、動作類型にあてはめると、MT 2・3・4がこれにあたる。

ii) 「しゃがむ」

各 Inf. が一致して有意性を認めているのは、項目A)・B)・C)であり、F)についても有意と見なしてもよいだろう。項目D)・E)に関しては、かなりばらつきが見られ、有意とはいえない。

したがって、動作特徴としては〈膝を曲げる〉〈腿とふくら脛を密着させる〉〈上体を前傾させる〉〈踵はあげてもあげなくともよい〉であり、動作類型はMT 7・8が対応する。

iii) 「うづくまる」

先にも触れたように、「うづくまる」になると殆どどの項目で回答の一致を見せている。

項目A)・B)・C)・D)・F)は全くの一致、E)についても Inf. d. を除けば一致を見せている。

特筆すべきは、項目D)がここでのみ有意を示している点である。これは、実に大きな意味を有しているものと思われる。この点については後述する。

以上から、動作特徴は〈膝を曲げる〉〈腿とふくら脛を密着させる〉〈上体を前傾させる〉〈背中を丸める〉〈臀はおろさない〉〈踵はあげない〉、動作類型はMT 9である。

iv) まとめ

各語に関する基本意識は、各 Inf. を通してかなり共通していることは明確だが、それでも多少の揺れや類型の“もれ”があることは否めない。たとえば、MT 5・6はどのような語で表現されるか、この資料だけでは判断できない。これは、恐らく Inf. の意識として、ある特定の姿勢をそれぞれ対応する語で固定して認識しているために、そこから少しずれた姿勢が問題となる訳であろう。

以上の東京共通語話者の基本意識は、筆者自身の内省とほぼ共通するものであり、したがって、以後、動作特徴および動作類型を問題にする場合、この結果をもってそれにあてる。

(注9) なお、MT11以降は、追補調査の際新たに考慮に入れた類型であり、基本姿勢を記述する本章では特に取り扱わなかった。適宜後述していく。

3. 2 用例分析

本章では、各語の文法的特徴(grammatical feature)を中心に分析を進めていく。

まず、「かがむ」には自動詞と他動詞の両用法がある。

- (4) 腰が かがむ。
- (5) 腰を かがむ。
- (6) 膝が かがむ。
- (7) 膝を かがむ。

文例(4)~(7)は、いずれも「~テイル」というアスペクト辞をとることが多く、また他動詞の用法は、通常「かがめる」という語によって置き換えられる。

- (4)' 腰が かがんでいる。
- (5)' 腰を かがめる。

このような他動詞の用法は、「しゃがむ」「うづくまる」にはない。

また、ガ格にくる名詞にも違いが見られる。

- (8) *腰/膝が しゃがむ。
- (9) *腰/膝が うづくまる。

表 3

	ヲ格	ガ格
か が む	N ₁ ヲ~	N ₁ ガ~ N ₂ ガ~
しゃがむ	*N ₁ ヲ~	*N ₁ ガ~ N ₂ ガ~
うづくまる	*N ₁ ヲ~	*N ₁ ガ~ N ₂ ガ~

(N: 名詞, N₁: 身体部位(腰・膝・身など), N₂: 動作主)

上の二点から見て、「かがむ」は身体のどの部位(主に、腰部・膝等)を曲折させるか、ということに視点をおく用法があることが判る。「しゃがむ」「うずくまる」には、この用法はない。

このような「かがむ」の用法は、次の「まげる(まがる)」「おる(おれる)」等の用法と同じものである。

- (10) 腰を まげる。
- (11) 腰が まがる。
- (12) 膝を おる。
- (13) 膝が おれる。

このことは、国立国語研究所1964で「かがむ」「まげる(まがる)」「おる(おれる)」が、いずれも「2.157。変形」に収められていることと符合している。——ちなみに、「しゃがむ」「うずくまる」は「2.339。立ち居」に共に収められている。

また、興味深いのは、先の東京共通語の調査結果とも符合していることである。「かがむ」が、腰(および膝)の曲折を本義とすることを、両分析はいみじくも表わしている。

また、「かがむ」は二格をとりにくいことから、動作を行なう場所そのものの表現には欠ける点があることもうなづける。

- (14) ?戸口に かがむ。

次に、「うずくまる」は次の二点で異彩を放つ。まず、第一には、二格にくる名詞である。

- (15) 炬燵に うずくまる。
- (16) 蒲団に うずくまる。
- (17) 車のシートに うずくまる。

この場合注意すべきは、文例(15)では臀をおろし、(16)・(17)では寝ているという点である。

これは、先の3.1.2.での理解と一見異なるが、この点に関しては追補調査で確認をした(MT21・22参照)。それによると、Inf. b. 以外は一様にこの用法を認めたのである。^(注10)

このような用法は、「かがむ」「しゃがむ」にはない。

- (18) *炬燵に かがむ。
- (19) 車のシートに しゃがむ。

文例(18)・(19)は、いずれも grammatical ではあるが、nonsensical な文である。なぜなら、炬燵や蒲団・車のシート・椅子にしろ、そこは本来寝たり坐ったりするところであり、その上でかがんだりしゃがんだりすること自体 nonsense であり、奇異な表現に感じるのである。

それが、「うずくまる」に限り表現が可能だとすれ

ば、示差的特徴(distinctive feature)として捉えることができる。

これは、「かがむ」「しゃがむ」がいずれも「どういう動作をとるか」ということを表現しているのに較べ、「うずくまる」は「どういう状態であるか」ということを表現しているためと考えられる。この点については、次の Inf. c の言葉は興味深い。

Inf. c.: 「しゃがんで うずくまる」という言い方を
をする。

このことは、先の調査結果で「うずくまる」の動作特徴にのみ、項目D)〈背中を丸める〉が含まれていたことと符合する。いわば、この特徴が強調され、顕現化したのが文例(15)~(17)の用法である。

第二点は、カ格の名詞が〔+human〕に限らないことである。

- (20) a 犬が うずくまる。
- b *犬が かがむ。
- c ?犬が しゃがむ。

このように、カ格に「犬・猫等」の獣がくることは普通の用法((注1)参照)だが、その理由は何であるのか。参考までに、国立国語研究所1972の記述を引用してみる。

「かがむ」「しゃがむ」は人間以外の動物について使われる。(例文略) このことは、おそらく「うずくまる」が人間の場合について、いろいろな姿勢をとる自由をふくんでいることに関係があるのだろう。

つまり、「かがむ」「しゃがむ」がより具体的に人間の姿勢をいいあらわしているのに対し、「うずくまる」はからだのどの部分がどのような姿勢をとるのかというよりも、からだ全体として低く小さくまとまっていることをあらわすのであり、その意味で動物にまでつかえるのではないかとおもわれる。”

(p. 145—146, 傍点筆者)

この記述で注意したいのは、前半の傍点の部分である。今まで見てきたように、「うずくまる」は姿勢としては非常に限定されたものであり——この点で上の記述は不正確である——、あえて自由であるというならば、むしろその場面の多様性である。後半の記述にもあるように、「うずくまる」はとにかく〈体全体を丸める〉ことである。「かがむ」「しゃがむ」が常に〈足で体重を支える〉のに較べ、「うずくまる」にはその制約がない。

この点から、犬や猫でも「うずくまる」ことができ

るのであろう。つまり、獣には「立つ」という動作が表現上欠落しているのであるから、その相補的動作ともいうべき「かがむ」や「しゃがむ」は表現しにくいという意識が働くのであろう。

先の用法と同じように、〈体を丸くする〉という意義特徴が強調された用法といえる。

—なお、辞書の記述で「うづくまる」の用法として「獣などが前肢を立てて……」とあるのは多少疑問が残る。やはり、前肢も折っていた方が、妥当な動作ではないか。「しゃがむ」との区別がつきにくい。実際、追補調査で「渋谷駅前のハチ公はしゃがんでいるか?」という質問に対し、Inf. 二人が許容を示した。これは、通常「おすわり」という語で表現されるように、未だ定着した語法ではない。

したがって、「うづくまる」が適当ということになるが、そのような誤謬を避けるためにも、動作の具体的な分析が望まれる。

この用法(文例(20) a)は、小説等では獣に限らず様々な動物や無生物までも、適用される傾向にある。

(21) 隅に、埃にまみれた芋虫が力尽きたように蹲っていた。

(西村寿行『双頭の蛇』角川文庫p. 163)

(22) ……コキンという手ごたえとともにヘビはそこへうづくまってしまった。

(西丸震哉『動物紳士録』中公文庫p. 11)

(23) 真紀子が、前方にうづくまる一軒の家を指さした。

(森村誠一『黒い墜落機』角川文庫p. 39)

文例は、いずれも現代作家等の文章の引用であるが、奇異な表現であるという印象は受けない。文例(23)は、レトリック(rhetoric)の一種だと解することも可能だが、(21)・(23)についてはそこまで考える必要はないだろう。

一体、「腰」や「膝」がないのはいうまでもなく、身体各部位の不明瞭な「芋虫」や「ヘビ」までもが、うづくまることが出来るのは、正に〈身体を丸める〉という特徴の顕現に他ならない。

○その他の用例

(24) a 落とした本を拾おうとして かがむ。

b Δ落とした本を拾おうとして しゃがむ。^(註11)

c *落とした本を拾おうとして うづくまる。

(25) a Δ落としたコンタクトレンズを拾おうとして かがむ。

b 落としたコンタクトレンズを拾おうとして しゃがむ。

c Δ落としたコンタクトレンズを拾おうとして うづくまる。

(26) a 木戸をくぐろうとして かがむ。

b *木戸をくぐろうとして しゃがむ。

c *木戸をくぐろうとして うづくまる。

(27) a *疲れ切って かがむ。

b Δ疲れ切って しゃがむ。

c 疲れ切って うづくまる。

(28) a 草を抜こうとして かがむ。

b 草を抜こうとして しゃがむ。

c ?草を抜こうとして うづくまる。

(29) a Δ靴のひもを結ぼうとして かがむ。

b 靴のひもを結ぼうとして しゃがむ。

c ?靴のひもを結ぼうとして うづくまる。

(30) a *子供が駄々をこねて かがむ。

b Δ子供が駄々をこねて しゃがむ。

c 子供が駄々をこねて うづくまる。

(31) a ?急にお腹が痛くなり かがむ。

b Δ急にお腹が痛くなり しゃがむ。

c 急にお腹が痛くなり うづくまる。

(32) a *寒さにこごえて かがむ。

b ?寒さにこごえて しゃがむ。

c 寒さにこごえて うづくまる。

(33) 伸子は屈んで鍵穴を見た。

(「伸子」国研1972より引用)

(34) 三人とも同じ恰好でしゃがんでいる。

膝をつき、首を前に突き出して、背中を丸め、……

(祖父江孝男『文化人類学のすすめ』講談社学術文庫 p. 87)

(35) それは、子どもを対面するように前に抱き寄せ、抱きしめて、熊とか自動車のほうにお尻を向け、うづくまる防御態勢だ。これが日本人の姿勢だ。

(会田雄次『日本人の意識構造』講談社現代新書 p. 9)

以上の文例も、各語の特徴を如実に表わしているのである。文例(24)・(25)では、同じ落とし物を拾う場合でも、その大きさ・大切さ、あるいは所在の明・不明によって、適する動作が異なってくることを示している。(28)になると、同じように草を抜く動作でも、a・b・cでは抜く草の種類が異なるという感がある。たとえば、aでは茎の長い草、bでは茎の短い草、cでは極端に短い草等々である。(29)でも、動作のぞんざい

さ(a)や丁寧さ(b),あるいは困難さ(c)といった語感が強調される。また、(30)・(31)・(32)では、「うづくまる」以外は、切迫感といったようなものが希薄である。

また、(33)ではこの「かがむ」は、膝を曲げないで上体のみ前傾させている感があり——これこそ正に「かがむ」の基本姿勢である(MT2)——、(34)の「しゃがむ」は動作類型のMT15にあたる。

がむ」は動作類型のMT15にあたる。

(35)の「うづくまる」は、この語の用法としては好例である。多くの場合、「うづくまる」はこの文例のように“心理的・肉体的な圧迫感”がある時に使われる。小説等での用例は殆んどそのような状況での使用であり、また日常での使用でも変わりはない。

表4

語格	ヲ格	ガ格	ニ格
かがむ	○身体部位 (=かがめる)	i) 身体部位(腰・膝・身など) ii) 動作主〔+human〕	— ? —
しゃがむ	—	○動作主〔+human〕 ?〔+animate〕	道, 床 など
うづくまる	—	○動作主〔±animate〕	i) 道, 床など ii) 炬燵, 蒲団, 椅子, 車のシートなど

4. 結語

3. 分析で見えてきたように、三語はいかなる面から眺めても、類義語としてはかなり特殊な性格のものである。それが、一般に類義語として扱われているのは、動作として似ている、という具体的事実による。

ことさらさように、三語はその性格を異にしている。(→図1, 表4参照)

各語の中心的意味をまとめれば、次のようになる。

かがむ: <腰(および膝)の曲折(=上体の前傾)>

しゃがむ: <身体を低く構える>

うづくまる: <(何らかの肉体的・精神的圧迫感に対して)体全体を極端に丸める>

三語が類義語となるのは、「かがむ」と「うづくまる」がそれぞれの中心的意味から、「しゃがむ」の意味に接近していった場合によるのであろう。

このことは、「しゃがむ」にくらべ、「かがむ」と「うづくまる」の用法がより幅広いということと大いに関係があると思われる。

(注1)

辞書	岩波	新明解	広辞苑
かがむ	①(四自)④折れまがる。 ⊖腰や足を曲げて低くなる。 ②(下二他)→かがめる。	(自五)①立った姿勢で、腰のあたりを前に曲げる。 ②しゃがむ。	(自四)①折れまがる。 ②腰や足を曲げて低くなる。 しゃがむ。
しゃがむ	(四自)ひざを折り、姿勢を低くする。 かがむ。うづくまる。	(自五)腰を落とし、ひざを曲げ、しりを下げたかっこうをする。	(自四)うづくまる。 かがむ。
うづくまる	(四自)からだを丸くしてしゃがむ。 ひざを折ってすわる。 けものが前あしを立ててすわる。	(自五)①しゃがんで、からだ全体を丸く小さくする。 ②〔獣などが〕後ろ足を曲げて、尻(シリ)を落とし、低い姿勢を取る。	(自四)①膝を折り腰を落とす。 しゃがむ。 ②獣などが前肢を立てて坐る。

→いずれも、第二版のものを引用した。

(注2) この動詞群には、「かがむ」「しゃがむ」「うづくまる」のほかに、古語、俚言形(ツクバウ、ツクナウ、コゴム)や複合語(カガミコム、シャ

ガミコム),あるいは関節等の曲折を表わす語(マゲル, オル)が含まれる。また、以上の語が上体の前屈等すなわちプラスの屈体を主に表現していたのに対し、マイナスの屈体を表現している語

(ソリカエル, フソリカエル) もこの枠に含まれよう。

本稿では、これらの語は特に取り扱わなかった。

(注3) このことは、「動作」を「意味」そのものとして捉えた、ということを表わしてはいない。確かに、指示物(referent)を意味とする考え方も存在するが、本稿では、その立場とはとらない。

(注4) この論考の中で、柴田氏はこの三語を中心とした考察を行なっている。

しかるに、その分析は未だ不十分なものであり、したがって氏自身も明確な結論を避けておられる。筆者は、氏と同郷ということから、この論考に興味を持ち、本稿の執筆を思い立ったのである。

以上のことから、本稿では、そこで問題となった三語の動作の明確な区別、および東京共通語(この用語については、柴田氏のそれをそのまま使わせて頂いた)の分析に紙幅をさいたのである。

なお、氏以外による分析も、未だ見ない。やはり、三語の特殊性によるものか。

(注5) この「状況」とは、各動作が実際にとられる場面を設定したものである。このような「意味付け」は左記の分析と同時に行うべきでもないことは、いうまでもなからう。

(注6) 調査に御協力頂いたのは、以下の方々である。記して感謝の意を表します。

内山千鶴(1957年6月生, 神奈川県川崎市在住)

柴田稔(1956年9月生, 神奈川県大和市在住)

田村直子(1957年11月生, 東京都小金井市在住)

嘉悦真理(1957年5月生, 神奈川県川崎市在住)

話者は、いずれも言語形成期をその土地で過ごしている。

(注7) Inf. b.については、他のInf.よりも低い姿勢を「かがむ」の領域に含める傾向があるものと思われる。

(注8) この動作特徴なるものが、意義特徴とどう関わるか、という点については次のように考える。動作特徴とは、いわば動作そのものの特徴、ある動作と他の動作とを区別する明確な相違点を指すのであり、意義特徴とはやはり一線を画さなければならぬ。

その上で、意義の面でも示差的特徴であると認められれば、それを意義特徴とすることは可能であろう。

なお、記号については、一様に〈 〉を使用した。

(注9) 先の調査(S. 54. 10)を補充するため行なったもの(S. 54. 11)。

主に、具体的な場面設定および文例に対する適切な語を選択させる、という質問形式をとった。

(注10) 筆者自身は、日常よく使う表現である。

(注11) 記号△は、最適ではないが、かなり適した表現であることを表わす。

記号がないものが、最適の表現である。

言語経歴：1955年5月、名古屋市北区に生まれる。0～18歳まで名古屋市。18～23歳まで松本市、23～24歳神奈川県川崎市中原区、24歳～横浜市港北区、現在に至る。

〔付記〕

脱稿後、いくつかの興味深い用例を採集した。その中の二、三を紹介する。

(36) ……暗間の金網ごしにキッチンと前の両肢をそろえて坐っている犬の姿が灰白く浮んで、一瞬、私は犬というよりお稲荷さんのキツネが、家の庭に来てしゃがみこんでいるような、幻想に取り憑かれた。

(安岡章太郎『犬をえらばば』新潮文庫p.46)

(傍点筆者)

(37) その犬は台所の土間のすみに丸くなって寝ていた。……(9行略)。すると、どうだろう、うずくまって寝ていた犬が、よろよろと立ち上ると、……

(前掲書p.182—183)(傍点筆者)

両文例は、本論の中でも問題とした点である。特に前者は、「一こむ」という接辞を伴っている点を考慮しても、「しゃがむ」が犬に対して使用されていることで目をひく。

この場合、本論で指摘したように、やはり傍点の部分に原因があると思われる。前肢を立て、腰をおろしている姿から、人間の「しゃがむ」という動作と結びつけたであろうことは、疑う余地のないことで、正に本論で指摘したとおりである。なお、「しゃがみこむ」は状態を表現している点で、「うずくまる」に近似しているという語感を筆者は有しているが、特に記さなかったのは本論でことわった。

上の問題点について、辞書類は「うずくまる」と記

述している点も本論で批判したが、それを裏付けるのが文例(37)である。

前肢を立てている場合は、「うずくまる」と「しゃがむ」の区別が不明瞭であるが、前肢も折ってあれば「うずくまる」のみで表現されよう。また、「丸くなって」と「うずくまって」がパラフレーズされている点

も興味深い。

以上の他にも、本論を裏付けるもの、あるいは逆のもの、様々の用例が存在すると思われるが、御教示頂きたい。合わせて、本論への批判等も頂ければ幸いである。

よわまる・よわる・おとろえる

吉田光美

1. はじめに

「よわまる」「よわる」「おとろえる」は、低下という変化をあらわす点で意味的に類似している。しかし、これらは常に言い換えができるわけではなく、各語間には意味の相違が感じられる。そこで、ここではこの三語をとりあげて分析検討し、それぞれの語の意味特徴を探ってみることにする。

2. 分析

- (1) 水圧が よわまる。
- (2) *水圧が よわる。
- (3) *水圧が おとろえる。
- (4) 権力が よわまる。
- (5) *権力が よわる。
- (6) *権力が おとろえる。
- (7) 期待が よわまる。
- (8) *期待が よわる。
- (9) *期待が おとろえる。
- (10) スピードが よわまる。
- (11) *スピードが よわる。
- (12) *スピードが おとろえる。
- (13) 風が よわまる。
- (14) *風が よわる。
- (15) 風が おとろえる。
- (16) 体力が よわまる。
- (17) *体力が よわる。
- (18) 体力が おとろえる。
- (19) *記憶力が よわまる。
- (20) *記憶力が よわる。
- (21) 記憶力が おとろえる。
- (22) *運勢が よわまる。
- (23) *運勢が よわる。
- (24) 運勢が おとろえる。

- (25) *容姿が よわまる。
- (26) *容姿が よわる。
- (27) 容姿が おとろえる。
- (28) ?心臓が よわまる。
- (29) 心臓が よわる。
- (30) 心臓が おとろえる。
- (31) *金魚が よわまる。
- (32) 金魚が よわる。
- (33) *金魚が おとろえる。
- (34) *糸が よわまる。
- (35) 糸が よわる。
- (36) *糸が おとろえる。
- (37) *(私が) 大切な本をなくして よわまる。
- (38) (私が) 大切な本をなくして よわる。
- (39) *(私が) 大切な本をなくして おとろえる。

「よわまる」は(1)(4)(7)(10)(13)(16)の例からわかるように、抽象物を主語にとることができる。低下するものは、抽象物の強さの程度(強度) [(1)(4)(7)(16)], 速さの程度(速度) [(10)], 勢いの程度 [(13)] である。ただし、勢いは自然現象^(注1)の勢いの場合に限られる。

程度の変化にはさまざまな段階が考えられるが、「よわまる」はゼロに至らない範囲内でのあらゆる段階のマイナス変化(低下)に用いられる。

(19)は「記憶力」すなわち抽象物が主語であるが、「記憶力」の低下は良さ(価値)の低下であって強度や速度の低下ではないので、「よわまる」は使うことができない。(22)も勢いの低下ではあっても主語が自然現象でないので、やはり「よわまる」は使えない。

また、ふつう「よわまる」は具体物を主語にとらない。^(注2)

これに対して「よわる」は(29)(32)(35)(38)の例のように、具体物を主語にとることができる。低下するものは、生物では健康状態 [(29)(32)] や心理状態 [(38)], 無生物